

令和4年度 オーストラリア・クィーンズランド州 Griffith English Language Institute 研修レポート

大阪府とクィーンズランド州は1988年の友好提携以来、青少年や教育分野などにおいて交流を行ってきました。その一環として、2005年から府立学校の英語科教諭を対象に、クィーンズランド大学が実施する英語指導法研修への参加プログラムを行って参りました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、Griffith English Language Instituteが提供するオンライン形式での英語指導法研修のプログラムを実施いたしました。大阪府からは5名の教諭にご参加いただきましたので、その研修報告の一部を抜粋・要約してご紹介いたします。

《令和4年度実施内容》

研修期間：令和4年7月28日（木）～7月29日（金）

午前授業：9:00～11:30 午後授業：12:30～15:00

研修内容：外国語として英語を教える教員のための英語指導法

形式：オンライン（Microsoft Teams）

研修先：Griffith English Language Institute

参加者：府立学校英語科教諭 5名

芥川高校	窪崎 まゆみ 教諭
和泉高校	久保 奏絵 教諭
和泉高校	安田 千絵 教諭
刀根山支援学校	原田 恵 教諭
東淀川高校	吉永 有莉 教諭

費用：＊研修費についてはクィーンズランド州が負担。（研修費には授業料、教材費を含む。）

＊オンライン接続にかかる通信費等は参加者負担。

研修までの流れ：（5月）府立学校へ周知・募集 → （6月）選考（作文） → （7月）研修当日

■研修内容

- 1日目午前 ・学習者のニーズ及び特徴
・第二言語の習得、英語教授へのアプローチ
- 午後 ・コミュニケーションのための言語教育アクティビティ
・授業の構成要素、授業の計画・準備
・ワークショップ1：1日目の内容を踏まえた授業計画を立てる
- 2日目午前 ・指示を与える、問題を出す
・フィードバックを与える、生徒の英語を訂正する
- 午後 ・ワークショップ2：授業計画に2日目の内容を追加して作成し、発表、互いにフィードバックを行う

（以下、参加者の研修報告書より抜粋・要約）

■研修から学んだこと

《学習者の特徴と効果的な指導法》

- 学習者は大きく4つに分類され、視覚型、聴覚型、読み書き型、運動感覚型のどのタイプかによって、効果的な学習法は異なる。
- グループワークで、どの学習者にどんなアプローチをすればいいか、どういうアクティビティが効果的かを話し合っって投稿し、他のグループの投稿も見ながら意見交換することで様々なアイデアを得ることができた。

《第一言語（L1）と第二言語（L2）の違い》

- 第一言語と第二言語の習得の仕方の違いを学んだ。授業で使うと有効だと研修中に学んだベン図を実際に用いながら、研修参加者で、出された項目（『習得に努力が必要』など）、L1、L2のどちらに当てはまるか、またはどちらにも当てはまるのかを考えた。
- L1としての言語習得時期は6歳までとされ、歳を取るにつれて難しくなることを学びました。

《効果的な授業計画》

- 授業の計画をする上で教師が把握しておくべき構成要素について学んだ。日本でも指導案を書くことがあるが、また違った捉え方ができて興味深かった。生徒がすでに得ている知識や、授業内で考えられる生徒の学習上の問題とその解決策なども、計画として事前に考えたうえで、授業に取り組むことは重要だと理解できた。
- Presentation, practice and production (PPP)と、Task-based learning lesson planを学んだ。PPPは先生が教えていくタイプなのに対して、Task-based learning lesson planは生徒の活動を通して学ぶスタイル。PPPの生徒の目標が加算、不加算名詞の違いやaやsomeの使い方を学ぶのに対して、Task-based learning lesson planの目標は誕生日会の食べ物や飲み物を買うといった、タスクの遂行を通して学習を促進するというものであった。

《授業内での指示の与え方》

- 生徒が授業内で行う活動の前などに、どのように指示を出せば簡潔でわかりやすいものになるかについて学んだ。簡単な英語を使えばいいというものではなく、ロールプレイやディクテーションなど活動ごとに指示の出し方が正しいのかを確認するアクティビティを行い、また、生徒がその指示を理解しているかの確認についても、どう伝えれば効果的に行うことができるのか学ぶことができた。
- 授業の進め方を考えるアクティビティの中で、私たち日本の教員は全員、すべての指示を伝えた最後に確認作業を行うと答えた。しかし、正解は説明や指示の直後に1つ1つ確認作業を行っていくことだった。確かに、前の指示がわからなかったら次の指示はさらにわからなくなっていくため、1つ1つ確認をいれることというのは非常に大切だと気付いた。

《質問の目的》

- 生徒にする質問には、以下の2つのパターンがある。
Referential Questions: 生徒が答えを知らない場合に使える質問の形式
Display Questions: 生徒が答えを知っている場合に使える質問の形式
それぞれを上手に使い分ける手法を学んだ。
- 生徒に質問をする目的にはさまざまなものがあり、文法や語彙の概念を尋ねる質問や、生徒の知識を尋ねる質問、授業内の指示などを確認するための質問など、大きく6つのカテゴリーに分けられることを知った。質問のタイミングだけでなく、内容や聞き方にも工夫が必要であることを学んだ。

《授業計画の作成・発表》

- グループに分かれて、2日間で学んだことをもとに、授業計画を立てた。短い時間でありながらも、生徒に少しでも興味を持たせられるように考え、アイデアを出し合いながら計画を立てていくことができ、大変良い議論ができた。
- 発表はどのグループも大変素晴らしいものだった。またそれに対するフィードバックの仕方なども含めて吸収すべきものがたくさんあった。

■今後に向けて

- 研修を受けてさらに、より細かい生徒観の分析が必要だと感じた。同じ内容の授業をするとしても、クラスが違えば毎回アプローチを変える必要があるかを考えるべきであり、また、生徒の反応も予測しておくべきだと実感させられた。授業計画を立てる際にも、生徒がその授業までにどこまで理解していて、授業の中ではどのような課題に直面するのかなど、生徒観を深くとらえてから計画を立てることに新鮮さを感じた。
- VARK model※の考え方を取り入れていく。教室でのICTの活用が容易になってきているので、視覚に訴えるのか、聴覚に訴えるのか、それがどのような効果があるのか。また、生徒や題材に応じた、VARKの効果、成果について、探っていく。
※視覚型(visual)、聴覚型(auditory)、読み書き型(read/write)、運動感覚型(kinaesthetic)の学習法
- アイスブレイクを今後の授業に生かしたい。今まで様々なアイスブレイクを試してきたが、今回体験したものは、より英語の力に、そして表現することにフォーカスするものであった。提示された絵について1分間英語を話し続けるというものだったが、人それぞれ絵を見て考える、思いつくことが違ってとても興味深かった。また、1分間英語を話し続けるということはなかなか大変なことだと身をもって実感した。話すためには英語の力だけではなく本来のコミュニケーションの力が必要で、その両方を必要とするこのアクティビティは個々の能力に応じて多少のアレンジを必要とするものの、生徒にとって効果的だと考える。
- 特に、lesson planは今まで以上に綿密に作成したい。小学校の教員が英語の授業をすることになり、本校も研修を行っているが、2学期以降、セミナーで学んだことを学校全体で共有したい。自身の授業では、教師のinstruction, question, feedbackを的確に実施し、生徒の特性に合ったアプローチをしていきたい。

※来年度も本事業を行う場合、令和5年4月頃にお知らせする予定です。参加については是非ご検討下さい。

《問い合わせ先》

〒559-8555 大阪市住之江区南港北1-14-16 大阪府咲洲庁舎37階
大阪府府民文化部都市魅力創造局国際課 (オーストラリア・クィーンズランド州担当)
TEL:06-6210-9312 FAX:06-6210-9316